

# 土づくりは高品質・良食味米安定生産の第一歩です！

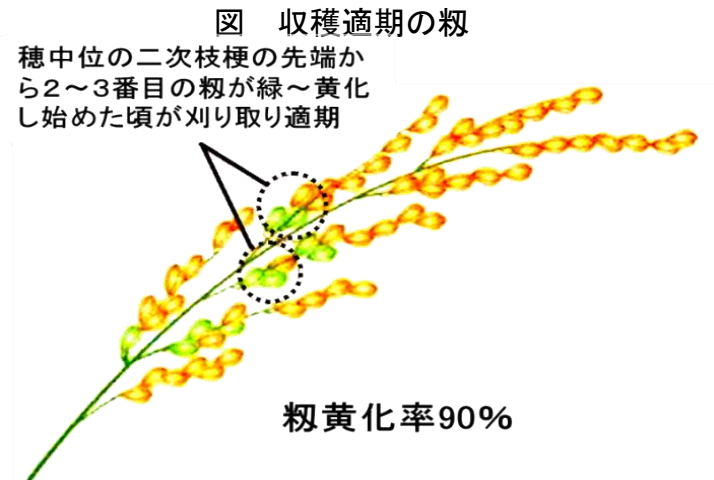
## 1 中生・晩生品種の収穫～フェーン時は胴割粒発生防止を徹底！～

### (1) 収穫適期の判断

- ほ場ごとの収穫適期は、穂全体の 85～90%が黄化し、穂の基部に緑色の籾が一部残っている頃です。
- 出穂後積算気温や茎葉の色だけでは収穫適期の判断はできませんので、**必ず籾の黄化率を確認して収穫適期を判断しましょう。**  
(下表の収穫適期のめやすを参照)

表 出穂期と収穫適期のめやす (9月7日現在)

	品種名	出穂期	出穂後積算温度	本年収穫適期のめやす※1
中生	コシヒカリ	8月1日頃	1,000℃	9月9日頃
		8月4日頃		9月12日頃
		8月5日頃(中山間地)		9月18日頃(中山間地)
		8月14日頃(山間地)		9月30日頃(山間地)
晩生	みずほの輝き	8月10日頃	1,050℃	9月20日頃
	いただき	8月11日頃	1,050℃～	9月21日頃～



※1 積算温度は高田のアメダスデータ(9月7日以降は平年値)を使用(中山間地及び山間地は関山のデータを使用)。今後の天候で適期が前後する可能性がある。

### (2) フェーン発生時の留意点

- 成熟期頃の籾水分が低い状態でフェーンなど空気が急激に乾燥した日に遭遇すると、その後、日を追って胴割粒が増加しますので、その日から5日以内に刈り取るようにしてください。
- フェーン時は、乾燥機の乾燥速度の設定を低くしても実際の乾燥速度が著しく早くなります。日中の加温乾燥は避け、常温で通風乾燥を行ってください。点火は夜間温度が下がってから行い、送風温度を低めに設定してください。
- 立毛中の籾水分が18%程度まで低下した場合は、粒ごとの水分のばらつきが大きくなっているため、張り込み時に通風循環した後、夜間まで半日程度貯留し、水分ムラを解消してから加温乾燥してください。

## 2 次年度に向け土づくりを行いましょ。10月中旬頃までが勝負です。

### (1) 土づくりの必要性

- 地力低下等による土壌環境の変化が、高温による水稻の品質低下の要因のひとつとなっています。
- 有機物や土づくり肥料のすき込みにより、保水性や保肥力、登熟後半の窒素供給力等を改善し、異常気象下でも安定した品質と収量を確保できる土壌を整備しましょう。

### (2) 土づくり肥料の投入状況

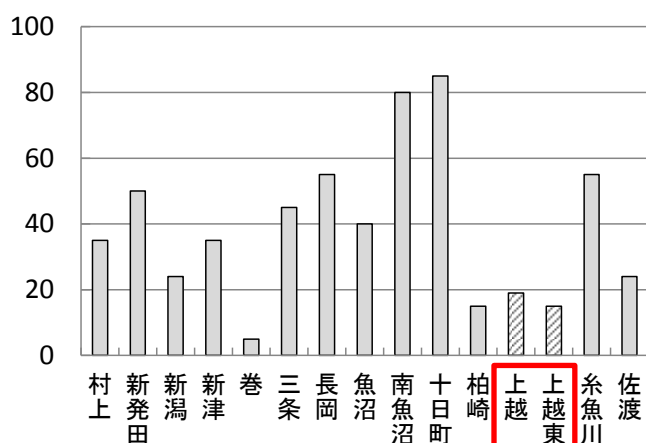


図1 平成27年度土づくり肥料投入率(新潟県)

- 上越地域は県内でも土づくり資材の施用率が低い地域、収量・品質の高位安定化には継続的な土づくりが必要です。

### (3) もみ殻の有効活用によるケイ酸供給

- 水稻の生育に重要な要素である「ケイ酸」の不足が問題になっています。
- ケイ酸は、倒伏防止や病害虫対策に加え、光合成や根の活性化、茎葉温度低下等の高温対策としても有効で、品質や食味の向上に役立っています。
- もみ殻には多くのケイ酸が含まれるので、収穫後できるだけ早い時期に田んぼに散布し、稲わらと一緒に浅めにすき込みましょう。

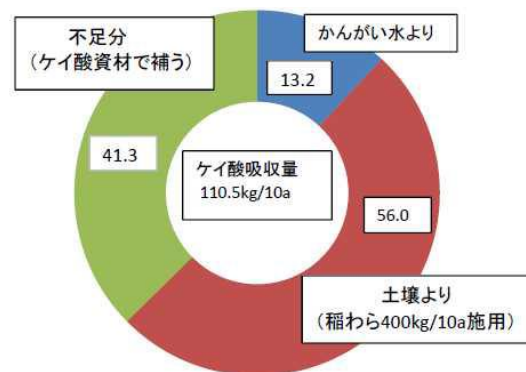


図2 水稻のケイ酸吸収量と供給源(北海道中央農試)

- 稲わらを春にすき込むと、根腐れの原因となるワキ(硫化水素)や温室効果ガスであるメタンの発生量が多くなり、ひどい場合には初期生育不良を引き起こしますので、秋すき込みを心掛けましょう。
- 秋すき込みでも気温が低くなると、稲わらの分解が遅くなるため、10月中旬までに終わるようにしましょう。気温の低い中山間地では腐熟促進剤等を活用しましょう。

### 【注意】

湿田や排水不良田では、すき込み後に排水溝等を作り、地表水の排水に努めましょう。

### (4) 土づくりは秋すき込みが効果的

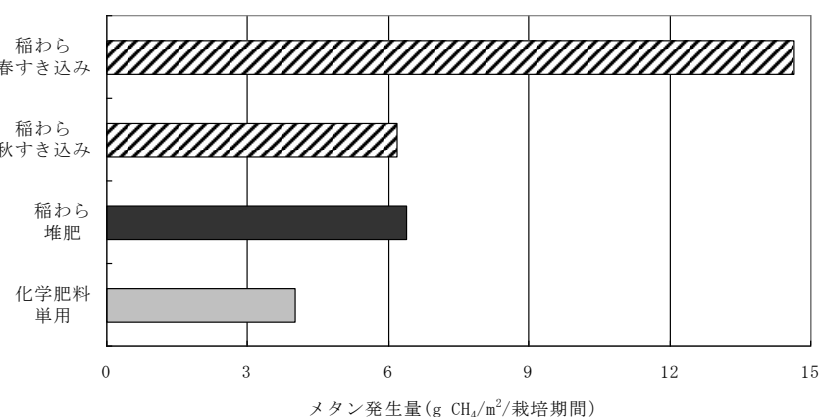


図3 水田からのメタン発生量に対する稲わら処理の影響(平成5年新潟県農総研)